様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　５日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010　～　2012
課題番号：22520575
研究課題名（和文）
日本人英語学習者による項構造の習得―結果構文と受動構文を比較して―
研究課題名（英文）
Japanese Speakers' Acquisition of English Argument Structure: Comparing Resultatives and Passives
研究代表者
稲垣　俊史（INAGAKI SHUNJI）
名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授
研究者番号：00316019

研究成果の概要(和文)：日本人英語学習者による英語の受動構文と結果構文の習得を調査した。その結果、日本人英語学習者は、(a) 母語で可能な間接受身の過剰般化（e.g., *I was stolen my bike）を起こし、これは習得が進んでも消えにくいこと、(b)「弱い」結果構文（e.g., I painted the wall red）のみを容認し、「強い」結果構文（e.g., The horses dragged the logs smooth）を容認しない段階から、習得が進むにつれて、両タイプの結果構文を容認する段階に移行すること、が明らかになった。この結果は、第二言語における項構造の習得の成否が母語の転移と学習可能性の見地から説明できることを、新たな領域で裏づけるものである。

研究成果の概要（英文）：This study investigated Japanese speakers' acquisition of passives and resultatives in English. Results showed that (a) Japanese speakers overgeneralized indirect passives (e.g., *I was stolen my bike), which are possible in Japanese, to L2 English, and that (b) while lower-level Japanese speakers allowed only "weak" resultatives (e.g., I painted the wall red), higher-level Japanese speakers allowed "strong" resultatives (e.g., The horses dragged the logs smooth) as well as weak ones. The results provide a new piece of evidence for the claim that L1 transfer and learnability considerations can explain the outcomes of the acquisition of L2 argument structure.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：第二言語習得論
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：第二言語習得、英語、日本語、項構造、受動構文、結果構文、母語の転移、学習可能性

１．研究開始当初の背景

(1) 動詞の項構造は第二言語習得（SLA）研究において最近注目を集めている（e.g., White, 2003, Ch. 7)。項構造とは述語の語彙エントリーに含まれる行為者（agent）や主題（theme）などの文法情報を指し、動詞の意味概念構造と統語構造に密接に関わっている。近年、理論言語学において項構造の性質や表象に関する理論構築が進んでおり(e.g., Grimshaw, 1990; Hale & Keyser, 2002; 影山 1996)、また第一言語習得においても項構造の習得に関する研究が盛んであ

る（Bowerman & Brown, 2007; Pinker, 1989; Gleitman & Landau, 1994）。このような関連分野の進展により、理論に基づいた項構造の SLA 研究が可能になり、そのような研究が L2 習得における母語の影響や普遍文法の役割の研究に新たな光を与えつつある（Juffs, 1996, 2000）。

(2) Inagaki (2001, 2002a, 2003, 2004, 2006) では、「着点を表す前（後）置詞を伴う動作動詞」の L2 習得を、日本語母語話者による英語習得と英語母語話者による日本語習得の双方向から調査した。この項構造に関して、英語では着点を表す前置詞（to, into）が様態を示す動作動詞（walk, swim）と方向を示す動作動詞（go, come）の両方と共起できる（John walked to school/went to school walking）のに対し、日本語では着点を表す後置詞（に）は、方向を示す動作動詞（行く、入る）と共起できるが、様態を示す動作動詞（歩く、泳ぐ）とは共起できない（ジョンは学校に ?* 歩いた / 歩いて行った）（Inagaki, 2002b; Talmy, 1985）。つまり、日本語で着点を表す後置詞をとる動作動詞の範囲は、英語で着点を表す前置詞をとる動作動詞の範囲より狭いと言える。絵を伴う容認度判断タスクを用いて調査したところ、中級レベル以上の日本語話者が英語の着点を表す前置詞を伴う様態を表す動作動詞（John walked to school）を容認したのに対し、英語話者は上級レベルでも日本語の着点を表す後置詞を伴う様態を表す動作動詞（?*ジョンが学校に歩いた）を誤って容認した。このことから、L1 で可能な項構造の現れが L2 より狭い場合は肯定証拠により学習可能であるが、その逆の場合は、L1 で可能な構造が L2 では不可能であることを示す肯定証拠が存在しないため、L1 の影響が消えにくいと考えられる。

(3) これまでの研究では、目標構造（着点を表す前（後）置詞を伴う動作動詞）を一定にして、学習者の L1 と L2 の組み合わせを変えて（日本語 L1−英語 L2 と英語 L1−日本語 L2）L1 の影響を調査した。本研究では新たに学習者の L1 と L2 を一定にして、目標構造を変化させるというアプローチを取る。そうすることにより、異なった学習者グループ（英語学習者と日本語学習者）を比べるのではなく、同じ学習者グループ（日本人英語学習者）の中間言語において異なった項構造特性がどのように表象されているかを検証することが可能になる。このアプローチは、これまでの研究を補い、進展させるのに有効な研究手法であると思われる。

(4) ただしこれには条件がある。L1 の項構造の現れが L2 より広い特性と、その逆に L1 の項構造の現れが L2 より狭い特性を同一の L1 と L2 の組み合わせの中に見つけ、両方の習得を比較する必要がある。

２．研究の目的

(1) 動詞の項構造の第二言語習得における母語の影響を調査する。特に、日本語母語話者による英語の結果構文と受動構文の習得を比較することにより、学習者の第一言語と目標言語における項構造の統語的現れの違いがいかに母語の影響の現れ方、ひいては L2 項構造の学習可能性に影響するかを検証する。以下に示すように、日本語話者の英語の受動構文と結果構文の習得を調査し、比較することは、項構造の L2 習得における母語の影響を検証するのに理想的な組み合わせである。

(2) 日本語では、他動詞の目的語が主語となって現れる直接受身（1）だけでなく、間接受身と呼ばれる他動詞の目的語を残したままの受身化（2）や自動詞の受身化（3）が可能である。これに対し、英語では直接受身（1)' のみ可能で、間接受身（2)', (3)'は許容されない（Washio, 1997; 鷲尾 1997）。つまり、この項構造の現れに関しては日本語（L1）の方が英語（L2）より広いと言える。

(1) 先生が学生たちに批判された。
(2) 先生が学生たちに論文を批判された。
(3) 太郎は花子に気絶された。
(1)' The teacher was criticized by the students.
(2)' *The teacher was criticized his article by the students.
(3)' *Taro was fainted by Hanako.

(3) ある行為により対象にある状態変化が引き起こされることを表す結果構文においては、状況は逆である。英語では、行為対象に生じる状態変化が動詞の意味に含まれている場合（4)' だけでなく、動詞自体は対象への働きかけのみを表し、その状態変化を含意しない場合（5)' でも結果構文が可能であり、さらにこの構文は行為のみを表し目的語を取らない自動詞にまで拡張される（6)'。Washio（1993）／鷲尾（1997）は（4)'のタイプを「弱い」結果構文と、(5)'や（6)'のタイプを「強い」結果構文と呼んで区別し、日本語では「弱い」結果構文（4）は可能であるが、「強い」結果構文（5), (6）は不可能であると述べている。つまり、この項構造の現れに関しては日本語（L1）の方が英語（L2）より狭いと言える。

(4) 僕は壁を赤く塗った。
(5) *馬が丸太をすべすべに引きずった。
(6) *彼らは靴をぼろぼろに走った。
(4)' I painted the wall red.
(5)' The horses dragged the logs smooth.
(6)' They ran their shoes threadbare.

(4) このように、受動構文は日本語の項構造の現れが英語より広く、結果構文はその逆である。つまり、この両構造の日本人英語学習者による習得を比較することは、項構造の L2 習得における母語の影響を検証するのに理想的な組み合わせであると言える。この状況を図示する図１、図２のようになる。この日本語と英語の比較と学習可能性の観点から以下の２つの仮説が導き出される。

１．日本人英語学習者は間接受身の過剰般化 (e.g., I was stolen my bike) を起こし、この過剰般化は習得が進んでも消えにくいであろう。
２. 日本人英語学習者は「弱い」結果構文 (e.g., I painted the wall red) のみを容認し、「強い」結果構文 (e.g., The horses dragged the logs smooth) を容認しない段階から、習得が進むにつれて、両タイプの結果構文容認する段階に移行するであろう。
本研究この二つの仮説を検証した。

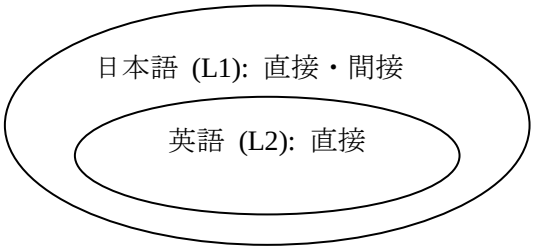

図１. L1 日本語と L2 英語の受動構文

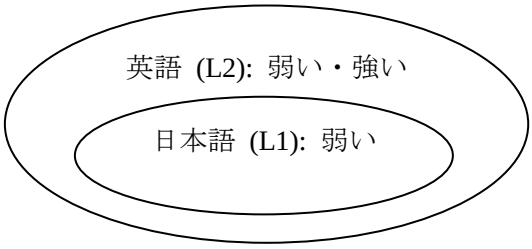

図２. L1 日本語と L2 英語の結果構文

３．研究の方法
(1) 実験１：日本の大学に在籍する日本人 28 人、オーストラリアの大学に留学中の日本人 28 人、英語を母語とする大学生 21 人を対象に、日英翻訳タスクと絵を伴う文法性判断タスク用いて英語の受動構文の習得を調査した。翻訳タスクは日本人の二グループのみに実施し、判断タスクは三グループすべてに実施した。

(2) 実験２：日本人英語学習者による結果構文と受動構文の習得の比較を比較するため、中級下と中級上の二つの習熟度レベルの日本人大学生と英語母語話者を対象に、結果構文と受動構文の両方の項目を含む文脈を伴う文法性判断タスクを実施した。

４．研究成果
(1) 実験１：日本の大学に在籍する日本人にも、オーストラリアの大学に留学中の日本人にも間接受身の過剰般化 (*I was stolen my bike) が見られ、L1 の項構造の現れが L2 より広い場合、学習可能性の観点から、L1 の影響が消えにくいという仮説がさらに支持された。なお、この研究では、Inagaki et al. (2009) で欠けていた統制群としての英語母語話者のデータも含まれており、研究の妥当性が高まった。予測された通り、英語母語話者は間接受身文をまったく容認しないことが明らかになった。

(2) 実験１の結果は仮説１を支持しており、日本人英語学習者は、日本語のみで可能な間接受身の過剰般化 (e.g., I was stolen my bike) を起こし、この現象は留学を経験中の比較的レベルの高い学習者にも根強く残っていることを、本データは示している。L1 で可能な構造が L2 では不可能である場合、このことを示す肯定証拠が存在しないため、L1 の影響が消えにくいことを支持する新たな証拠と言える。

(3) 実験２：日本人英語学習者は「弱い」結果構文 (e.g., I painted the wall red)のみを容認し、「強い」結果構文 (e.g., The horses dragged the logs smooth) を容認しない段階から、習得が進むにつれて、両タイプの結果構文容認する段階に移行する傾向を示した。受動構文に関しては、実験１と同様に、日本語のみで可能な間接受身の過剰般化 (e.g., I was stolen my bike)が見られ、この現象は上級レベルでも消えくいことを示す結果が得られた。

(4) 実験２の結果構文の結果は仮説２を支持しており、L1 で可能な項構造の現れが L2 より狭い場合は、肯定証拠により学習可能であることを示している。第二言語習得の成否は L1 転移と学習可能性の見地から説明できるという主張の新たな証拠と言える。さらに、同じ日本人英語学習者グループ内で、結果構

文は習熟度の増加とともに「強い」結果構文の習得も進むのに対し、受動構文は習熟度が増加しても間接受身の過剰般化が消えにくいことが示されたことにより、仮説１と仮説２がさらに強固な形で裏づけられたことになる。

(5) まとめると、実験１と実験２の結果は、第二言語習得の成否は L1 転移と学習可能性の見地から説明できるという主張を新たな領域で、新たな視点から裏づけており、SLA 研究へ新たな貢献をもたらすものであると言えよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 稲垣俊史、書評 『ことばの習得－母語獲得と第二言語習得』 鈴木孝明・白畑知彦（著）くろしお出版、2012 年、英語教育、査読無、61 巻(４号)、2012 年、pp.91-92
② 稲垣俊史、中国語話者による日本語のテンス・アスペクトの習得について—アスペクト仮説からの考察—、中国語話者のための日本語教育研究、査読有、第２号、2011、pp.15-26
③ 稲垣俊史、中国語話者による日本語の移動表現の習得について—英語話者と比較して—、中国語話者のための日本語教育研究、査読有、創刊号、2010、pp.28-40

〔学会発表〕（計３件）
① 稲垣俊史、第二言語習得（SLA）研究の魅力－「やさしい日本語」で論文を書くために－、一橋大学大学院言語社会研究科講演会、2012.12.23、一橋大学
② 蓮池いずみ、稲垣俊史、日本語話者による英語の空間表現の習得における母語の影響－英語話者の日本語習得データと比較して－、日本第二言語習得学会（J-SLA）、2011.6.11、文教大学越谷キャンパス（埼玉県）
③ 稲垣俊史、中国語話者と英語話者による日本語の移動表現の習得、日本第二言語習得学会（J-SLA）、2010.6.12、岐阜大学

６．研究組織

(1)研究代表者
稲垣　俊史（INAGAKI SHUNJI）
名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授
研究者番号：00316019

(2)研究分担者
稲垣　スーチン（INAGAKI SHUCHUN）
大阪府立大学・高等教育推進機構・准教授
研究者番号：50405354

(3)連携研究者なし